(東女医大誌　第43巻　第6号
頁　516～520　昭和48年6月)

働く主婦と育児の問題

第1報　至誠会員における概況

一三会

土肥　浩子（ドヒ ヒロコ）・松野マサヨ（マツノ）・浦田とめ子（ウラタ）
三好　静鹿（ミヨシ シヅカ）・清水五百子（シミズイホヨ）・佐藤椰子枝（サトウヤスエ）
中川　貞子（ナカガワ サダコ）・岩本由基枝（イワモトユキエ）・矢野千鶴子（ヤノチヅコ）
笠井　和（カサイ カズ）

(受付　昭和48年3月5日)

はじめに

近来，婦人の社会進出は目覚ましいものがあり，今までは結婚前の数年をあまり責任のない分野で働き，結婚と共に家庭に入るのが一般であつたが，このところ，結婚後も各分野で活躍する婦人が増加して来た．共働き夫婦が増加したわけで，婦人の職業と家庭生活，更に妊娠，出産，育児等婦人の特性を考慮して種々の問題が論じられている．殊に育児は人間の基礎造りの時期として，寸秒の怠りなく展開される発育を正しくし，将来有為の成人となるように，個人としても，家族としても，地域集団，更に国家としても，全人類の発展のためにも大切なことである．日本においては第二次世界大戦後，核家族化が進み，都市集中の高度経済成長，住宅問題がこれに拍車をかけて，共働きの場合に保育に欠ける児が急速にふえ，17才の非行少年も幼い頃保育にかけた環境のために，正常な発達を妨げられたためとさえ言われた．私共は婦人の立場殊に医を志して生涯の仕事として選んだ女医の立場としても，働く主婦と育児については反省もし，充分調査も行ない，母にも子にもよい解答を見出したいと考えた．本学卒業生の大多数は医業に従事しながら，結婚して家庭を築き，舅姑に仕え，子を育てて，妻として，医師としての使命を完うしている．母校は創立以来70年余を経過しているので，時代の変遷につれ社会状勢も変り，各人の環境，経験も異るが，どの時代においてもそれぞれ努力，工夫して，仕事と育児の実をあげている．そこで先ず至誠会員（東京女子医専～東京女子医大卒業の女医）の共働きの概況を知るためにアンケート調査を行なつた．働く主婦と育児の問題はもちろん女医のみの問題ではなくて，女教師，看護婦，保母はもとより，電話局，専売局，その他工場の仕事から役所の管理職等々，各分野においても考えられなければならない．

第一段階として至誠会員についての集計結果を報告する．

対象および調査方法

至誠会員数は約 5,000，通信可能な数は約

Hiroko DOHI, Masayo MATSUNO, Tomeko URATA, Shizuka MIYOSHI, Ioko SHIMIZU, Yasue SATO, Sadako NAKAGAWA, Yukie IWAMOTO, Chizuko YANO, Kazu KASAI (IZUMIKAI): Child care of working housewife. Report I. Case of the members of Shiseikai.

4,500である．この中の 940人に表1のようなアンケートを発送した．

940人の選び方は表2のような年代別にし，その現在年令と時代的背景は表3のようになる．大体5つの年代にわけて発送したのであるが，資料を均等にするために，昭和30年以後を大学卒としてまとめて集計した．

妊娠，出産，育児という婦人の特性のために，どのくらいの期間仕事を離れたかということを主として調査し，児はどのくらいの期間，あるいはどのような時期に母を身近に必要とするのか，何才ぐらいまで母と共に生活をするのが将来のためによいのかを知る手掛りになればと思つたのである．

出産・育児で仕事を中断する期間は夫の職業，妻の仕事の態勢別に関係するか，母に代る育児担当者は誰か，児への影響の有無，仕事と育児を両立させる心構え，工夫等についてまとめて見た．

調査成績および考按

アンケート発送の 940人中回答のあつたのは

第1表 アンケート

1) 現在年令＿＿＿才，卒業年度　大・昭＿＿年＿＿月

2) 結婚年月日　大・昭＿＿年＿＿月＿＿日，結婚時年令＿＿才　　未婚

3) 子供有（　　人）　子供なし

	性別	生年月日	現在年令		性別	生年月日	現在年令
第1子	男・女	大・昭＿＿年＿＿月＿＿日	＿＿才，	第4子	男・女	大・昭＿＿年＿＿月＿＿日	＿＿才
第2子	男・女	大・昭＿＿年＿＿月＿＿日	＿＿才，	第5子	男・女	大・昭＿＿年＿＿月＿＿日	＿＿才
第3子	用・女	大・昭＿＿年＿＿月＿＿日	＿＿才，	第6子	男・女	大・昭＿＿年＿＿月＿＿日	＿＿才

4) 育児期間の居住地（地方別）　北海道　東北　関東　中部　関西　中国　四国　九州　外国

（0～3才11月　（都ヒ別）　大都市（　　）中小都市（　　）農村（　　）漁村（　　）

までを育児期間とします．）　山　村（　　）

5) 育児時期の職業　夫　医師（開業，勤務）その他＿＿＿＿＿＿

妻　医師（夫の手伝，妻のみ開業，妻のみ勤務，その他＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

6) 育児の主たる担当者　祖父（父方，母方），祖母（父方，母方），女中，子守，その他＿＿＿＿＿＿

育児は　母が直接同居で，別居（祖父母宅，親類宅へがづけて）で，保育施設（昼夜間，昼間）で．

7) 仕事よりはなれていた月数　　妊娠＿＿で月，出産で＿＿月，育児のため＿＿月

子により差異あれば　　第＿＿子＿＿　　＿＿　　＿＿

第＿＿子＿＿　　＿＿　　＿＿

8) 経験上乳児期又は幼児期の母子隔離が子供に影響すると思うか．

影響する　　影響しない

1)　（仕事をもつていたために子供を逝くしたと思われることがあつた．例えば＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

2)　（子供の精神発達に影響あり　　例えば＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

3)　（その他　　例えば＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

9) 職業と家庭（殊に育児）との両立について

両立する　1)　子供にも親にもよく両立可能

2)　子も親も多少の犠牲があるが両立可能

3)　イ．母が仕事量をへらして自分で育てた場合

ロ．ひる間仕事中は特定の保育担当者にあづける場合（個人保育）

ハ．保育園施設にあづけた（集団保育）

両立しない1)　母が仕事をやめた　　ずつと現在まで＿＿＿＿＿＿いつまで休んだ＿＿＿＿＿＿

2)　昔なら社会がゆつくりしていたから出来たが今の忙しい社会では出来ない．

10) 仕事をもち家庭をもち，子を育てた立場からの反省，御意見，御感想又は未来像などをおきかせ下さい．

（＿＿＿の部分は書き込み，概当するものに○をつけて下さい．10）は御自由に御書き下さい．未婚あるいは子供のいない方は貴女がこうするであろうというお考えでお書き下さい）

第2表 アンケート返信状況

卒業年度＼発送返信数	発送数	返信数	%
大正11～15年	200	70	35
昭和13～16年	270	115	42.55
昭和24～26年	208	104	50
昭和30～31年	175	104	39.69
昭和40～41年	87		
計	940	392	42.55

第3表 対象の現在と育児時期の状況

現在年令と卒業年度	家庭と社会状況	
	子や孫の年代と家庭状況	育児の時期の社会情勢
65才以上(大11～15)	子は中堅として活躍，孫は大学卒に近く仕事をへらしていく頃	安定したよい時代で人手もあつた
50才以上(昭13～16)	子女結婚適齢期，孫も出来，仕事の他に役職あり	第2次大戦中，物資欠乏，夫出征も多く，人の信頼感はある
40才以上(昭24～26)	在学中が戦中戦後で子供は学生である，仕事にもあぶらがのり活躍中	戦後次第におちつき，物も出まわつたが，人手へり信頼もへる
35才以上(昭30～31)	本人大学卒のはじめで，男女同権といつてもまだ多少古い時期	物は充分にあるが，人手と信頼のない頃
30才前後(昭40～41)	結婚は早くなり，子供0～2才位母は研究勉強中	衣食住安定するも，次第に世情騒然とする

392人，子供のない人や記入不備のもの 100人を除く 292人の集計である．

夫と妻の職業，仕事態勢別にその人数，育児のために仕事を休んだ期間を見たのが表4，表5，図1である．

夫妻共医師であるのは 200 (68.5%)，夫が他職業は92 (31.5%) で，やはり同業の者が多く，大学卒の年代では80%同業であつた．妻の仕事態勢では開業が圧倒的に多く 176 (60.3%)，勤務80 (27.4%)，家事専念は36(12.3%)で，年代別では開業は古い方から60%，53%，41%，28%と次第に少なくなつている．この差は年令によるばかりでなく，社会状勢にも関係し，勤務も認められるようになつて来たものと思われる．自宅開業が多いのは育児の面から見ると都合よい点も多いようで，働く母の知恵かも知れない．家事専念は戦前，戦中の2時代は 6.3，6.5%で，これに比べ戦後は17，14.8%となつている．これは人手，住居，収入等の面も併せて，夫が同業で理解ある場合が多く，1時期仕事を中断する場合も含まれているように思われる．

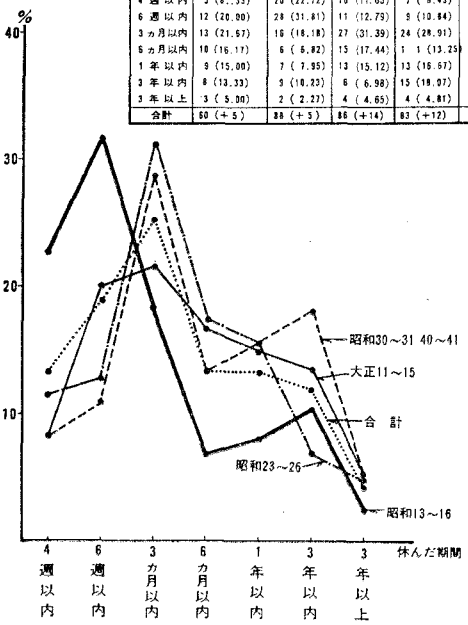
第4表 各年代別夫妻職業態勢

夫妻職業態勢別＼卒業年度別			大11～15	昭13～16	昭23～26	昭30～31 昭40～41	計
夫医師開業	妻	開業	18	33	24	15	90
		勤務	1	0	1	0	2
		家事	1	0	2	0	3
勤務		開業	5	10	11	8	34
		勤務	3	7	7	31	48
		家事	2	1	9	11	23
他の職業		開業	19	17	10	6	52
		勤務	2	5	14	9	30
		家事	2	4	3	1	10
合計			53	77	81	81	292
子供なし，未婚，不明など			17	40	20	23	100
総合計			70	117	104	104	392

第5表 妊娠・出産・育児のために仕事を休んだ期間

	大11～15	昭13～16	昭23～26	昭30～31 昭40～41	合計
4週以内	5 (8.33)	20 (22.72)	10 (11.63)	7 (8.43)	42 (13.25)
6週以内	12 (20.00)	28 (31.81)	11 (12.79)	9 (10.84)	60 (18.93)
3ヵ月以内	13 (21.67)	16 (18.18)	27 (31.39)	24 (28.91)	80 (25.23)
6ヵ月以内	10 (16.17)	6 (6.82)	15 (17.44)	11 (13.25)	42 (13.25)
1年以内	9 (15.00)	7 (7.95)	13 (15.12)	13 (15.67)	42 (13.25)
3年以内	8 (13.33)	9 (10.23)	6 (6.98)	15 (18.07)	38 (11.98)
3年以上	3 (5.00)	2 (2.27)	4 (4.65)	4 (4.81)	13 (4.10)
合計	60 (+5)	88 (+5)	86 (+14)	83 (+12)	317 (+36)

( ) は%



第1図 妊娠・出産・育児のために仕事を休んだ期間

妊娠，出産，育児で仕事を離れた期間は大よそは4カ月で，10年休んで児がある程度成長した後に再び仕事をはじめた人，永久に仕事を止めて家事，育児に専念した人もある．

表5，図1のように全般的には6週以内は60（18.93%），3カ月以内80（25.23%）が多数を占めている．やはり第二次大戦中に育児を行なわなければならなかつた昭和10年代卒のグループが最も短く，最短3日で，6週以内が48（54.53%）となり，他の年代と異つている．出征による医師不足，銃後の護りとしての責任感から無理を承知で頑張つたものかと考える．戦後の年代の者は勤務態勢になれていることと，労働法規で産前産後6週間ずつ休暇がみとめられることから，多くはこの規則通り3カ月の休み，または産後に更に1カ月を加えて4カ月ぐらいを休む者が多くなつている．昭和23～26年代卒の27（31.39%），大学卒の24（28.91%）が3カ月以内である．

母仕事中の育児担当者は，表6のように祖母，女中，子守となり，人手の得易い時代は祖母と女中，子守で保育しているが，戦中，戦後は身内の者が多くなり，大学卒では保育園利用者も増加し，人手不足と共に人間相互の信頼面の変遷もうかがわれるような気がする．

アンケートに書かれている意見によると，母方祖母に育児を担当して貰つている場合が母としては安定した気分で仕事ができ，子も問題なく育つが，父方祖母の場合も子には同じ立場であるが，母の安定度に関係するせいか，差異があるようだという．いうまでもなく，女中，子守による個人保育の場合は，その保育者個々の人柄により保育の良否，子への影響が異なる．近頃は核家族が多く，住宅事情で祖父母と共に住めない，女中，子守をおく室がない等で，育児に苦労する母も多いようである．その上，祖母も何かの形で社会進出をしていて，孫の育児を手伝うことができない場合もある．表6に見るように，大正年代に祖母が少なく，戦中育児を行なつた昭和10年代から祖母が多くなり，現在まであまり差のない事は社会情勢も関連すると思われ，女中は全年代を通して差が少ないのは，育児には経験的に人手が必要であることを物語つている．子守というのは責任ある育児担当者がいて副として育児を担当するものであるが，古い年代に多いのは母が自宅開業，または祖母の手助けとして考えられる．

第6表　年代別育児担当者

育児担当者＼卒業年度	大11～15	昭13～16	昭23～26	昭昭3040～3141	合計
祖父	2	3	2	4	11（実数）
祖母	13	29	27	26	95
女中	25	25	22	23	95
子守	17	13	8	5	43
その他	3	18	20	12	53
保育園	0	0	7	13	20
計	60	88	86	83	317

母の立場として，母が職業を持つ事で幼児期の母子隔離が子に悪く影響するのではないかということは問題である．表7に見られるように，良し悪しは別として影響ありが大多数で，なしとするのは48人（16.9%）であつた．何らかの形で子に影響があるが，母としてはこれを良い影響にするよう努力し，且つできると言つている．大学卒では影響なしと答えたものは20人（24.4%）で，婦人の職業に対して社会一般の考え方も母たる人の考え方も，従来の規範を脱出できて広く考えるように変つて来たのではないかと思われた．

母子隔離の害を除くために，母は子と共にいられる時間にはスキンシップを充分に考え，話合いをよくし，殊に食事を共にするように努力したという．幼くても母の職業をわかるように説明し，子もその職業を尊く考えるように理解させることも大切である，とも言つている．

今回のアンケートでは都鄙別の差はあまり見られなかつた．

以上の成績は，すべて意識的に予測された範囲内のもので，それだけに母の負担は多く，苦心苦労の跡が見える．日進月歩の医学に遅れないように努力し，患者に対し最高最善の処置や治療を行い，精神的な安定も与えるようにするには，育児のために長期間仕事を休んだ場合，高速度の進歩を逐げている今日の医学に対してこの中断を取り返すのは非常に困難である．そして育児は次の世

第7表 母子隔離の影響の有無（母の意見）

卒業年度別			大11～15		昭13～16		昭23～26		昭31～31 昭40～41		合計	
夫妻職業態勢別		母子隔離の影響の有無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無
夫医師開業	妻	開業	16	2	32	1	23	1	12	3	83	7
		勤務	1	0	0	0	0	1	0	0	1	1
		家事	1	0	0	0	2	0	0	0	3	0
勤務		開業	4	1	7	3	10	1	5	3	26	8
		勤務	3	0	7	0	5	2	20	11	30	13
		家事	1	1	1	0	9	0	11	0	22	1
夫他職業	妻	開業	14	5	15	2	7	3	3	3	39	13
		勤務	2	0	5	0	9	5	9	0	25	5
		家事	2	0	4	0	3	0	1	0	10	0
合計			54	9	71	6	68	13	62	20	239	48

代の人間を育てるために1日もゆるがせにできない親のつとめであり，母子隔離が子に将来取り返しのつかない傷跡を残してはならない．一方婦人の地位向上，能力発揮は社会が男女で成り立つ以上やはり必要なことと思われる．

大正年代の感想の多くは，保育は祖母や女中が行なつてくれたので自分は真面目に医業に打ちこみ，母として大きな視野から考えて真面目に生活する時は，子は幼時には淋しさを感じる時もあるようだが，成長につれて父母の生き方を正しく認め，母の職業を理解し，尊敬と共に誇りに思い，親となつては同じ態度でその子を育てて誤りはなかつたと，2代にわたる成果を見届けている．

既に成人した子供の考えとしてうなづけるところであるが，幼い時の淋しさ，欲求不満などはそれぞれの年令で，どのように現れ，どのように受け止められ，どのようにのり越えて行くのか，働く母をもつ子供の側からの調査が必要であると思う．なお，社会状勢上，次第に集団保育の場が活用されるようになるので，至誠会としても，若い会員のため，地域の働く母のために，社会福祉法人至誠会保育園を設立した．集団の中で無理なく保育が行われ，働く母が充分に能力を発揮できるようになりたいものである．

この調査のまとめとしては，今の日本においては親も子も多少の犠牲はあるが，職業と育児は両立できて，子にもよい影響を与えられるということである．それには，母の職業と育児に対する意欲と，母の健康が第一であり，加えて周囲の協力と理解が必要である．殊に夫のはげましと理解ある協力は大切で，母が安定した心境で，精神的に満足を感じつつ働けるということが必要な条件となる．

む す び

働く主婦と育児の問題について調査し，親子共に最良の道を見出したいと思い，至誠会員 940人に対してアンケート調査を行なつた．

1) 育児のための仕事中断期間は，出産も含めて3～4カ月が大多数である．

2) 母の仕事中の育児担当者は，祖母，女中が多く，殊に祖母の場合が母の安心度が多い．

3) 幼児の母子隔離の影響はあるが，努力によりよい方向にもつて行くことができる．

4) しかし，今後の世代の女医は，目覚しい医学の進歩に遅れず，人手不足の社会情勢下に仕事と育児を両立させるのは中々むつかしいことである．

調査には不備の点も多かつたが，更に考察，研究して，働き易く，母の能力も充分発揮でき，育児にも支障のない態勢になるようにしたい．他の職業についても調査して行くつもりである．

終に臨み御校閲を賜つた福山教授に深謝し，アンケート調査に御回答下さつた至誠会員各位に御礼申し上げ，今後共御協力を御願いする．

（本報告の要旨は1972年第6回国際婦人会議ならびに第38回東京女子医科大学学会総会において発表した．）